

2022年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	コロナ禍における、観光産業で働く子育て女性の労働と生活 —宿泊業で働く女性達への就労継続に関するインタビュー調査—
キーワード	① コロナ禍における宿泊業、② 女性労働研究、③ 労働と暮らし

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	シミズ ユリコ 清水 友理子
配付時の所属先・職位等 (令和4年4月1日現在)	浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 講師
現在の所属先・職位等 (令和5年7月1日現在)	浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 講師
プロフィール	観光社会学と労働社会学を主な軸として、伝統工芸、観光、農業といった地域の文化・社会・経済を支える人々の営みについて研究しています。これまで沖縄の琉球ガラス工房での参与観察や、長野松本のクラフトフェアと工芸作家、職人の協働と地域づくりの実践について研究してきました。また活動として沖縄県から文化事業を複数受託し、琉球ガラスの国指定伝統工芸を目的とした歴史調査活動や、地域文化の魅力の発見・発信を目的としたワークショップの開催、工芸品の接客販売などを実施しました。

1. 研究の概要

新型コロナウイルスの世界的流行とそれに伴う移動の規制によって、観光産業、とりわけ宿泊業に従事する子育て中の女性がどのような影響を受けたのかを明らかにすることである。本研究では、宿泊業に従事する女性労働者、とりわけ子育て世代の彼女たちを対象に、彼女らがいまどのような状況にあるのか把握すること、そして安定したキャリア形成／継続のために必要なものは何かという視座のもと、労働と暮らしに関する今日の実態を、インタビュー調査によって捉えた。

2. 研究の動機、目的

本研究の動機は、これまで観光社会学の視座から「観光と労働」の関係について研究しており、また在籍する大学では観光専攻に所属し、指導学生の進路支援も行っている。コロナ禍においても観光産業への進路を希望する学生は少なくなく、その多くは女性の学生が多い。研究、教育、さらに学生の進路指導にも向き合うなかで、観光産業における女性労働の実態を明らかにすることの重要性を感じるようになったからである。

そのため本研究の目的は、観光産業に従事する女性が安定したキャリアを形成し継続するために必要なものは何かを明らかにすることである。この視点は、大学での観光に関連するキャリア教育においても、地域社会の持続可能な発展においても、取り組むべき重要な課題であろう。

3. 研究の結果

本研究の調査成果は学会で積極的に公表し、現在学術論文も執筆中である。本研究から明らかになったことは、具体的には次の4点である。なお、宿泊業についての調査は概して地域・時期・業態・規模によって働き方が大きく異なる。その結果、それぞれが持つ特徴の掛け合わせによって取れるデータにばらつきが出るため、本研究では【小規模経営（ゲストハウス）・地方】に従事する女性のライフヒストリーから女性の働き方を考察した。

まず1点目は、コロナ禍によって彼女たちが受けた経済的な影響について、彼女ら自身は「甚大なものではなかった」という感想を持っていた点である。店の経営は助成金などを利用し、収益は減ったけれども、収入が減るということではなかったという。むしろ彼女らに与えるストレスが経済的/精神的に強かったのは、スタートアップ時の方だった。この個人事業主として地方の宿泊業を営む女性の働き方のモデルケースが少ないからと考えられる。

次に2点目は、地方でゲストハウス/カフェという小規模な宿泊・飲食業を営む際、経営的にも個人的にも、地域社会ネットワークへの参入と、関係構築が常に求められる点である。また職住分離が難しいなかで、インタビュー対象者らは常に「おかみさん」としての振る舞いを求められているという点が指摘できる。また職住分離していない働き方をコロナ以前よりしている彼女らにとっては、ステイホームによって働き方に大きな変化があったということは見受けられなかった。

3点目は、彼女らが地方での小規模経営宿泊業（ゲストハウス）に参入する決定要因はパートナー、家族の存在が大きいことが分かった。

最後に4点目は子育てのなかで具体的に利用したサポートは義母・実母あるいは行政のサポートが主だったが、特徴的だったのは商店街仲間の「おかみさん」といった、地域社会での母世代の女性の存在もあった点である。そうした子の存在により彼女らと地域社会のアクター達との関係が再構築される可能性も今回確認された。

以上が今回の研究で明らかになった点だが、今後の課題としては以下の2点が挙げられる。

まず1点目は、前述したとおり宿泊業についての調査は概して地域・時期・業態・規模によって働き方が大きく異なる。そのため都市部・大規模ホテルの女性労働や、地方都市・大規模ホテルの女性労働などを網羅的に分析するに至っていない。2点目は、コロナ前・コロナ禍・コロナ後によって女性労働がどのように変化したのかについても検討が不十分である。

以上の点については、今後のさらなる調査を進めていく必要があると考える。

写真①：学会報告での様子



写真②：調査地



4. 研究者としてのこれからの展望

研究実施者はこれまで“地域文化”を担う人々の労働や文化活動を、脱工業化する地域社会との関わりのなかから明らかにしていくことを目指してきました。

これからの研究の展望としては、引き続き観光産業における女性労働を扱い、今回の調査で明らかにできなかった点を継続して明らかにしていきたいです。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究を実施するにあたり、日本私立学校振興・共済事業団および関係者各位の皆様からのご支援を賜り、誠にありがとうございました。このようなご支援があったからこそ、コロナ禍により研究の環境が変わり、これまでの研究調査の継続が難しくなった中でも、新たな研究テーマに挑戦することができました。

本研究で得られた結果を活用して、観光研究・観光産業・地域社会に貢献できればと考えております。そのために引き続き、調査の範囲や対象を拡げ研究を続けてまいります。どうか、今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。